

## — 研究テーマ・研究の重点を中心に —

3年次研究の3年目となる今年度は、「道徳的価値に照らして、より深く、より豊かに考え、自己の生き方を見つめ直す子どもの育成」を研究テーマに、「(1) 多面的・多角的に自己の生き方を見つめることができる授業づくりの手立て」、「(2) 子ども自身が問題意識をもつことができるための導入の工夫」を研究の重点として進めてきた。3年次研究の後半は、新型コロナウイルスの感染拡大にともなう休校期間、行事等の中止・縮小、変更等、様々な対応の中で進められることとなった。

本授業実践は、令和3年度春季公開研究協議会として実施されたが、授業を録画し、協議会では、録画した授業を編集して放映し、それをもとにオンラインで協議をするという形で開催された。これまでにない新しい取り組みであり、先生方には計画、準備段階から周到に検討していただき、大過なく実施された。むろん、教室の雰囲気等、映像では伝わりにくい点もあったことなど課題はあるものの、移動や時間的拘束などの制約が少なくなったことから、遠方からも多くの参加をいただいて開催できたことに、改めて敬意を表したい。

以下、本研究授業における研究の重点及び研究テーマについて検討してみたい。

### 「子ども自身が問題意識をもつことができるための導入の工夫」について

本授業実践では、印象に残った場面を児童に出してもらい、それをもとに教師と児童で「問い」を練り上げていく方法がとられた。この導入の工夫は、これまでも実践を重ねてきたものであるが、教師と児童との信頼関係、また、教師のコーディネート力も問われるものである。今回も教師と児童との信頼関係を基盤に、小室先生のコーディネート力が発揮された導入となっていた。

子供のことばから「問い」を練り上げていく場合、「問い」としてとり上げられなかった発言への対応が必要となる。今回の授業実践では、子供から出された複数の場面について、そこに共通する課題を整理する形で「問い」を練り上げ、子供たちの発言を生かして話し合いの方向性が定められていた。こうしたコーディネートは、深い教材分析があったからこそ可能となったといえるだろう。

### 「多面的・多角的に自己の生き方を見つめることができる授業づくりの手立て」について

本授業において実践された「手立て」として、「①葛藤のトンネル」と、「②手品師の心の中の優位性のランキング」の二つをとり上げてみたい。

まず、「①葛藤のトンネル」である。「葛藤のトンネル」とは、児童の代表1名が教室の机間を、友達からの「心の声」をかけてもらい、代表の児童も自分の心の中を「吐露」しながら歩いていく、というものである。本授業実践での様子は、「Ⅲ 研究の実践」の(2)では、葛藤のトンネルを通った児童の姿を中心に報告されているが、授業では「心の中」をかける児童もまた、「葛藤のトンネル」を通る児童と同様、「手品師」に「なりきる」ことで「共感的 (empathic)」に自分自身を見つめている様子が看取された。

こうした「共感的に自分自身を見つめる」姿は、「②手品師の心の中の優位性のランキング」を整理したからこそ可能となったといえるだろう（「Ⅲ 研究の実践」の(1)参照）。本授業は【A(2) 正直・誠実】をねらいとするものであるが、「手品師」の迷いは、【希望】【責任】【正直】【思いやり】等の道徳的価値と【誠実】との葛藤である。こうした「葛藤」をマトリクスで整理したうえで、それぞれの優位性をランキングにして話し合う活動を行った。

ランキング形式を取り入れることで、心的・内的葛藤を可視化され、話し合いで検討する葛藤の内容が明確となり、多様な価値観をふまえつつ、自分の道徳的価値観を省察する姿が看取された。ただし、ランキングはあくまで「手段」であり、ランキングが「目的」とならないよう十分留意する必要がある。本授業では、授業者の配慮によって、ランキングが児童の視野を広げるための「手段」として機能していた。

以上、研究テーマをふまえ、「導入の工夫」、「葛藤のトンネル」、「優位性のランキング」に即して本授業の意義を検討してきた。これらの工夫が有効に機能するためには、①児童の実態把握をふまえた授業のねらいの明確化、②綿密な教材分析・教材研究が不可欠であろう。これは、「道徳科」のみならず、教科指導に共通する基本であるが、そうした基本に忠実であることが、児童の「自律的な学び」にとって重要であることを再認識させられる授業であった。